

可能の助動詞 können および kunnen を用いた要求表現の比較

Vergleich der Aufforderungsausdrücke mit Möglichkeitsmodalverben *können* und *kunnen*

末松 淑美

SUEMATSU Yoshimi

オランダ語の可能の助動詞 kunnen には、比較的強い要求を表現し、ドイツ語の sollen で翻訳される用法がある。いっぽうドイツ語の可能の助動詞 können は、人の意志に由来する「許可」の用法もあるが、主に客観的な可能性を表現することが多い。本稿は、用法の違いの背景にある両言語の視点の違いを、理論と具体例の両面から分析することを目的とする。まず辞書と文法書においてドイツ語とオランダ語の可能の助動詞 können と kunnen の意味がどのように記述されているかを比較し、その後、具体的な翻訳例との対応関係を調査した。その結果、①比較的弱い要求表現では、können も kunnen も同じように使用されるが、強い要求では können は使用されにくい傾向があることが分かった。また、② kunnen には、「受け入れざるをえない結果」という必然的帰結の意味で使用されることがあり、können 単独で同じ意味に使用される例は見つからなかった。

キーワード：語法の助動詞、ドイツ語、オランダ語、対照言語学、認知言語学

1. はじめに

ドイツ語とオランダ語の可能を表わす語法の助動詞 können と kunnen は、とても近い意味で使われる。しかし、丁寧にその言語使用を観察すると、特に話者の要求・指示など意志的な内容を表現するときに、異なる使われ方をしている例がある。本稿では、辞書や文法書の記述を確認したうえで、翻訳例を分析し、その差異の背景にある視点の違い、意味構造の違いの分析を目的とする。

次の第2節で、本稿の目的や、出発点となった疑問について、具体的に説明する。第3節では、ドイツ語・オランダ語それぞれの動詞の語形について、比較分析のさいに気をつけるべき点を確認する。第4節では、辞書・文法書等にかかれている können と kunnen の意味記述を比較し、両言語の共通の意味区分を作成して、例文分類の基盤とする。そして、これらの基準を踏まえて、第5節では、ドイツ語・オランダ語翻訳コーパスから抽出した例文を分析する。第6節では、分析を経て見えてきた können と kunnen の語彙的意味および用法の違いをまとめ、その背景を認知言語学的視点から読み解く。第7節は、今後の課題である。

2. 分析調査の目的

2.1 出発点となった疑問

ドイツ語 können とオランダ語 kunnen の違いを最初に強く意識したのは、次のオランダ語からドイツ語への翻訳例を読んだときである。

- (1a) De smaak van het bier *kon* hij (= vader) echter niet vergeten. Daarom ging hij naar de heks Neschi; die *kon* het voor hem toveren, ook in zeven emmers tegelijk. ⁽¹⁾
- (1b) Aber den Geschmack des Biers *konnte* er nicht vergessen. Darum ging er zur Hexe Nesschi; die *sollte* für ihn Bier zaubern, und zwar sieben Eimer zugleich. ⁽²⁾
- (1c) でも、そのとき飲んだビールの味が忘れられない父は、魔法のネシのところへ行き、ビールをバケツに七杯、魔法で出してくれるようにたのみました。 ⁽³⁾

(1a) がオランダ語の原文である。そのドイツ語訳が (1b)、日本語訳が (1c) である。オランダ語の児童文学賞受賞作品『ネジマキ草と銅の城』からの一節で、ドラゴンが自分の父親の悲しい思い出について語る場面である。

表1 kunnen から sollen への翻訳例

* []内はページ番号。下線とイタリック体は本稿執筆者による。

オランダ語原典	ドイツ語訳	日本語訳
Hij (= Koning) stond op van zijn troon en <i>zei</i> tegen de haas <i>dat</i> de leeuw het best in de torenkamer <i>kon</i> logeren. [63]	Er erhob sich von seinem Thron und sagte zum Hasen, der Löwe <i>solle</i> am besten im Turmzimmer schlafen. [60]	王は玉座から立ちあがり、ライオンを塔の部屋に泊 <u>まらせるように</u> と、ノウサギに告げた。[127]
De smaak van het bier <i>kon</i> hij echter niet vergeten. Daarom ging hij naar de heks Neschi; die <i>kon</i> het voor hem toveren, ook in zeven emmers tegelijk. [83] = (1a)	Aber den Geschmack des Biers <i>konnte</i> er nicht vergessen. Darum ging er zur Hexe Nesschi; die <i>solte</i> für ihn Bier zaubern, und zwar sieben Eimer zugleich. [79] = (1b)	でも、そのとき飲んだビールの味が忘れられない父は、魔女のネシのところへ行き、ビールをバケツに七杯、魔法で出してくれる <u>ように</u> たのみました。[169] = (1c)
Toen werden ze bang dat ze <i>zouden</i> verschrom-pelen, maar Idoer hield hen, die de berg in <i>wilde</i> vluchten, tegen en zei dat ze beter langs de helling van de berg naar beneden <i>konden</i> gaan om daar schaduw te zoeken. [128-9]	Da bekamen sie Angst, sie <i>würden</i> verschrumpeln, aber Idur hielt sie zurück und sagte, sie <i>sollten</i> lieber den Berghang hinuntergehen und sich dort Schatten suchen. [126]	干からびてしまうのではないかと、小人たちは不安になったが、イドゥールが山に逃げこもうとする仲間たちをひきとめ、「山の斜面をおりていって、そこで日かげを探した <u>ほうがいい</u> 」と言った。[262]
出典：Biegel, Paul (1964) <i>Het sleutelkruid</i>	出典：Biegel, Paul (2012) <i>Eine Geschichte für den König</i>	出典：ビーヘル、パウル (2012) 『ネジマキ草と銅の城』

(1a)には、*kunnen* の過去形 *kon* が2回使用されている⁽⁴⁾。1つ目の *kon* は、動詞 *vergeten* (忘れる) および否定詞 *niet* とともに使用され、「忘れることができない」ことを意味している。可能性の否定である。その後ドラゴンの父は、悪い魔女ネシに、魔法でさらに多くのビールを出してくれるように要求しに行く。2つ目の *kon* は、ドラゴンの父が魔女のところへ行く目的を述べる文で使用され、動詞 *toveren* (魔法で出す) とともに「魔法で出してもらう/出させる」という要求内容を表現している。

ドイツ語訳(1b)では、*konnte* (可能) と *solte* (主語以外の意志) に訳し分けられている。日本語訳(1c)でも、「られる」と「してくれるように」に訳し分けられている。前者は可能の表現、後者は要求・依頼の表現である。2つの *kon* は、明らかに異なる意味で使用されている。

この例文は、Suematsu (2019) で使用したドイツ語・オランダ語対照コーパスに含まれていたものだが、そのときの論考テーマとは関連しなかったため、取り上げなかった。ただ、①このような要求・依頼表現の *kunnen-sollen* 翻訳ペアが、オランダ語からドイツ語への翻訳にのみに見られ、ドイツ語からオランダ語への翻訳には見られなかったこと、そして、②ドイツ語

können は一般的に客観的な可能性を表現する語として理解されているのに、同語源の *kunnen* は主語外の意志を表わす *sollen* で訳される例があること、この2点に疑問を感じていた。それが、今回の新たなコーパス調査を構想するに至った理由である。

2.2 問題提起

Suematsu (2019) で使用したコーパスには、ほかにも2つ似た例⁽⁵⁾が見つかった。いずれも発話状況がよく似ている。明示的である場合とそうでない場合があるが、いずれも間接語法の文中にある。文脈には、その文の発話者がいて、助動詞 *kon(den)* の主語となる当事者に何らかの行為を要求または指示している。例文(1a)の場合、発話者はドラゴンの父であり、文主語であるネシに、ビールを魔法で出すことを要求している状況ということになる。

前述①の背景としては、ドイツ語 *sollen* は、主語外の第三者の意志や要求を表現することが多く、オランダ語に訳される場合は、主に *moeten* または *zullen* に置き換えられることが多いという理由が考えられる⁽⁶⁾。可能を表わす *kunnen* と結びつけにくいという予想もできるかもしれない。翻訳の例文を扱うとき、翻訳者がバイリンガルとは限らない点を常に考慮しなければ

表2 können と kunnen を含む動詞群の対照表 (非認知的用法のみ；単独用法も除く)

können (ドイツ語)	時制	kunnen (オランダ語)
können ... V-inf	直説法・現在 (～できる)	kunnen ... V-inf
konnte(n) ... V-inf	直説法・過去 (～できた)	<u>kon(den)</u> ... V-inf
haben ... V-inf + können	直説法・現在完了 (～できた)	hebben ... kunnen + V-inf
könnte(n) ... V-inf	非現実／仮定・現在 (～できるのだが…)	zou(den) ... kunnen + V-inf <u>kon(den)</u> ... V-inf
hätte(n) ... V-inf + können	非現実／仮定・過去 (～できたのだが…)	had(den) ... kunnen + V-inf *オランダ語では、過去完了と 非現実／仮定の過去が同じ形

* V-inf = 動詞の不定詞

*時制欄の「非現実／仮定」には、婉曲表現等の用法も含まれる。

ならない。母語干渉を受けている可能性もある。もう少し多くの翻訳例を見る必要があるであろう。

前述②の背景としては、können では表現できない kunnen の意味があるということが想定できる。もしもその意味を実証的に示すことができれば、非常に興味深い。そして、それはドイツ語 können の意味の輪郭をより明瞭にすることにつながる。

そこで、本稿では、別の翻訳者がオランダ語からドイツ語へ翻訳した新しい文献をもとに、kunnen と können を含む原文訳文の対照コーパスを作成し、それぞれの語の用法の違いを、特に要求・指示・依頼を含む場面を中心に観察し、「können では表現できない kunnen の意味」を探することを目的とする。

3. können と kunnen の語形について

現代オランダ語の動詞には、ドイツ語のような接続法の語形がない。そのため、英語と同じように現在の文脈で過去形を使うことによって、仮定の話や非現実の話をしたり、婉曲な表現をすることがある。今回取り上げる kunnen の過去形 kon(den) もその一例で、非現実的用法として使用されることもある。動詞群の語順も含めて、表2にまとめた。今回の分析では、認知的用法は対象としていないので、非認知的用法を中心とし、必要なものだけを載せる。

中央の「時制」の列には、可能を意味する日本語「～できる」を理解の助けとして載せている。もちろん翻訳にはさまざまな可能性があることは言うまでもない。

直説法の現在と過去については、統語上の違いはな

い。現在完了についても、「完了の助動詞＋話法の助動詞の代替不定詞⁽⁷⁾＋本動詞の不定詞」の3語から成る点是不変である。ただし、話法の助動詞と本動詞の語順が、ドイツ語とオランダ語では異なる。ドイツ語は「本動詞＋助動詞」、オランダ語では「助動詞＋本動詞」の順が一般的である。

表2の時制欄では、下の2つの項目に「非現実／仮定」という表記を使った。ドイツ語の接続法に相当する用法である。オランダ語には接続法に相当する語形も用語もないため、中立的な表現を選んだ。ただし、非現実や仮定の話、婉曲表現などに使われる点は、ドイツ語もオランダ語も同じである。

まず非現実／仮定の現在であるが、ドイツ語には könnte(n) という接続法の語形があるのに対し、オランダ語では英語と同じように、現在の文脈で過去形 kon(den) を使用することによってそれを表現する。それに加えて、第二の方法として、zullen の過去形 zou(den) を非現実のマーカーとして使用方法もしばしば使われる。zou(den) と kunnen をともに使って、非現実の可能を表現するのである。

さらに非現実／仮定の過去であるが、ドイツ語では完了の助動詞 haben の接続法Ⅱ式を使った接続法・過去 hätte(n) ... V-inf + können という形があるのに対し、オランダ語では過去完了 had(den) ... kunnen + V-inf を使って過去の非現実または仮定の話を表示する。

これから例文を正しく読み解いていくうえで重要なのは、次の2点である。①オランダ語の kon(den) という語形は、過去を意味するときと、現在の非現実／

仮定の話の意味するときがある。②現在の非現実／仮定の可能性を表現するとき、ドイツ語では *könnte(n)* ... *V-inf* が使われるが、オランダ語では、*kon(den)* ... *V-inf* または *zou(den)* ... *kunnen*+ *V-inf* の2種類が使われる。

4. 辞書・文法書の記述の比較

4.1 表3の概要

比較の基盤を作るために、ドイツ語とオランダ語の辞書および文法書の記述をもとに、*können* と *kunnen* の非認識的用法の意味を整理し、表3にまとめた。今回の調査では認識的用法は取り上げないので、省略した。

表3の中央の列は、「意味の分類と特徴」である。分類のベースにしたのは、ドイツ語の文法書 *Duden Band 4*⁽⁸⁾ の分類である。最新の言語学の成果を取り入れた抽象度の高い分類となっている。話法の助動詞は、背景に何らかのモダリティ源があり、その影響でそれぞれの意味が生じる。*können* の場合は、「可能性」が生じる。非認識的用法は、まずこのモダリティ源のタイプによって二つに分類されている。主語外のモダリティ源に由来する可能性と、主語内のモダリティ源に由来する可能性である。後者は、たとえば主語の持つ能力や習得した技術などに由来する可能性 (Variante 4) である。前者の主語外のモダリティは、さらに3つに分類されている。

1つ目は、人間には変えることのできない自然の摂理などに起因する可能性 (Variante 1)、2つ目は、客観的な外的状況に起因する可能性 (Variante 2)、そして3つ目は、話者を含む主語以外の意志に起因する可能性 (Variante 3) である。原典の *Duden Band 4* の記述は、[] の中に書き添えた。この枠組みに、ドイツ語は *Duden Band 10*⁽⁹⁾ からの例文を追加し、オランダ語は、文法書 *Algemene Nederlandse Spraakkunst (= ANS)*⁽¹⁰⁾ および辞書 *Van Dale*⁽¹¹⁾ からの例文を当てはめていった。その結果、Variante 2 と Variante 3 をさらに下位分類することになった。順に、それぞれの分類の定義を確認する。

4.2 各分類の定義

Variante 1は、*Duden Band 4* にのみ例文が載っていた。物事の性質や自然の摂理など、人間には及ばぬ力に起因する可能性を意味する。広く捉えれば、Variante 2の「外的状況」に含めてしまうこともできるかもしれない。オランダ語に等価と見なせる例文は

なかった。ただし、辞書にないからこの意味では使われないとも言えない。

Variante 2は、具体的な外的状況に起因する可能性である。*können* および *kunnen* は、この意味で使われることが多い。オランダ語の文法書 *ANS* の分類と整合性を持たせるために、どうしても下位分類が必要になった。表3の Variante 2a の例文の下の [] 内の言い換え表現を見てほしい。両言語とも「機会がある」という表現が含まれている。ドイツ語は、*Duden Band 10* の記述より引用、オランダ語は *ANS* の記述より引用している。例文を読んでも、当事者には選択の自由がある。いっぽう、Variante 2b のオランダ語の例文の下には、[*moeten* (必然的帰結)] と書かれている。

(2) *Ze laten alles maar staan, en ik kan het opruimen.*

彼らは何もかもやりっぱなし、そして私がそれを片付けることになる。⁽¹²⁾

少し皮肉も込められた言い回しであろうか。ただ、述べられた状況から選択の自由は感じられない。具体的な外的状況が揃った結果、その選択肢を選ばざるを得ない状態になったということである。そこで、「選択の自由がある」Variante 2a に対し、Variante 2b を「具体的な外的状況に起因する可能性」であり、かつ「ある行動をするための条件が整う」状態として定義した。ドイツ語の例文の中にも、少し似たニュアンスのものがあった。

(3) *Darin kann ich Ihnen nur zustimmen.*

その点について私はあなたに賛成します (賛成しかできない)。

ただ、この例文には *nur* 「しか～ない」が含まれているために、オランダ語例文のような「必然的帰結」として解釈できる。したがって、厳密な意味で等価と思えるドイツ語例文は、辞書・文法書の範囲内では見つかっていない。

Variante 3は、主語外の意志に起因する可能性である。話者の意志に起因する場合は、主語は話者ではないということになる。モダリティ源は、「主語外の意志」という意味特徴を持つドイツ語の *sollen* と同じである。しかし、モダリティ源から発せられるモダリティの質が異なる。*sollen* の場合は「要求」であるのに対

表3 können と kunnen の非認知的意味の比較

können (ドイツ語)	意味の分類と特徴	kunnen (オランダ語)
モダリティ源 = 主語外 (extrasubjektiv)		
Der Vulkan <i>kann</i> jederzeit wieder ausbrechen. (火山はいつ何時にも噴火する可能性がある。)	Variante 1 物事の性質や自然の摂理に起因する可能性 [durch die Natur der Dinge, die Beschaffenheit der Welt bedingt]	
Da ich ohnehin nächste Woche nach Mannheim reise, <i>können</i> wir schon bald unsere Gespräche fortsetzen. (いずれにしても来週マンハイムへ行くので、まもなく話し合いを継続することができる。)[die Möglichkeit haben, etwas zu tun(何かをする機会がある)]	Variante 2a 具体的な外的状況に起因する可能性 [durch konkrete äußere Umstände bedingt]; a) 選択の自由がある。	Op zaterdagmiddag <i>kan</i> hij nooit zwemmen, want dan moet hij werken. (土曜日に彼は絶対泳ぐことができない。なぜならその日は仕事をしなければならないから。) [de gelegenheid hebben (機会がある)]
(?) Darin kann ich Ihnen nur zustimmen. (その点について私はあなたに賛成します。)= (3)	Variante 2b b) ある行動をするための条件が整う。	Ze laten alles maar staan, en ik <i>kan</i> het opruimen. (彼らは何もかもやりっぱなし。そして私がそれを片付けることになる。)= (2) [moeten (必然的帰結)]
Ich <i>kann</i> nicht mitfahren; meine Eltern haben es verboten. (私はいっしょに行くことができない。両親が禁止したので。)= (5); <i>Kann</i> ich bitte mal den Zucker haben? (お砂糖をとっていただけますか。)= (6)	Variante 3a 話者を含む主語外の意志に起因する可能性 [durch einen extrasubjektiven Willen, eventuell den Willen des Sprechers bedingt] a) 許可など; 選択の自由あり	<i>Kan</i> ik opruimen, of zijn jullie nog niet klaar? (片付けてもいいですか。それとも君たちはまだ終わっていないのですか?) = (4) [mogen (許可)]
	Variante 3b b) 社会的規範などに起因する可能性	Dat <i>kun</i> je niet doen! (それをしてはいけない!) [Dat is niet behoorlijk. (適切ではない)]
モダリティ源 = 主語内 (intrasubjektiv)		
Vögel <i>können</i> fliegen. (鳥は飛ぶことができる。) [imstande sein, etwas zu tun; etwas zu tun vermögen (何かをすることができる状態にある; 能力を持っている)]	Variante 4 主語の身体的・精神的・生まれつきの能力に起因する可能性 [durch körperliche, geistige, angeborene usw. Fähigkeiten des Subjektaktanten bedingt]	Hij <i>kan</i> heel goed zwemmen. (彼はとても上手に泳げる。) [het vermogen bezitten (能力を持っている)]

参考: Duden Band 4 (2016); Duden Band 10 (2018); Algemene Nederlandse Spraakkunst (1984, 2021); Van Dale Groot woordenboek van de Nederlandse taal (2015).

し、können および kunnen は「許可」である。表3の Variante 3a のオランダ語例文の下には、言い換えの可能性として mogen (許可)⁽¹³⁾ が挙げられている。つまり、主語には選択の自由がある。表3の例文は、主語が話者の疑問文で、聞き手の許可を尋ねている。

- (4) *Kan ik opruimen, of zijn jullie nog niet klaar?*
片付けてもいいですか。それとも君たちはまだ終わっていないのですか。

ドイツ語の例文も同じ状況を表現している。Duden Band 4からの引用は否定文で「禁止」を表しているが、Duden Band 10には、オランダ語例文とよく似た「許可」を尋ねる疑問文も載っていた。間投詞 *bitte* (お願い)が入っているので、発話意図は「依頼」である。

- (5) *Ich kann nicht mitfahren; meine Eltern haben es verboten.*⁽¹⁴⁾
私はいっしょに行くことができません。両親がそれを禁止したので。
- (6) *Kann ich bitte mal den Zucker haben?*⁽¹⁵⁾
お砂糖をとっていただけますか。

このように、Variante 3a は、「許可」が問われている文である。話法の助動詞以下の部分で述べられている行動が「許可」により可能であるが、実現するかどうかが未定であると、この分類を定義する。否定文では、この「許可」が否定されるので、選択の余地がなくなる。

Variante 3b を別分類にした理由は、ANS で [mogen (許可)] とは別の用法として分類されていた [Dat is niet behoorlijk. (適切でない)] という言い換え表現があったからである。「禁止」とは異なる。背景に何らかの判断の基準になるものが存在するはずである。behoorlijk (ふさわしい) という語は、「行儀が良い」「その場に適した行動・服装」などの文脈でしばしば使われる。社会的規範や慣例と言い換えることもできるであろうか。

いっぽうドイツ語では、Duden Band 4の können の用法解説が、müssen との組み合わせで書かれている。可能性と必然性というモダリティの強さの差異はあるものの、背景となる発話状況は共通しているという理由からである⁽¹⁶⁾。そこには、「規範などに起因する」という分類も載っているのだが、例文に können を含む文はなく、müssen の例文しか載っていない。

そして、müssen を含む例文では、文内容も規則やルールが基準とした必然性を表現している。

そこで、Variante 3b は「社会的規範などを背景として判断されたふさわしさ」として、区別することにした。Variante 2の下位分類としなかったのは、社会的規範が、客観的・物理的状況よりも人の意志に関わると考えたからである。

ところで、Variante 3a のドイツ語の例文の中に、気になるものが1つあった。

- (7) *Du kannst jetzt gehen.*⁽¹⁷⁾
君はもう行ってもいいよ。

明らかに、主語外（この場合は話者）の意志に起因する可能性 (= 「許可」) を意味している。「もう行く」という可能性を許可された主語は、たいていの場合「行く」という行動を選択する。限りなく「指示」に近い発話ということができる。語用論的には、können が可能性以上の意味で使われることがあるということであろう。

Variante 4は、主語内のモダリティ源に起因する可能性である。主語が持つ能力や技術が、行動などを可能にする。表3の例文を見れば明らかであろう。Duden Band 10の言い換え表現にも vermögen (～する能力がある)、ANSの言い換え表現にも vermögen (能力) と共通する語彙が使用されている。

辞書や文法書における語彙の意味記述は、あくまでもプロトタイプ的な用法(典型例)を挙げたもので、すべてを網羅しているわけではない。しかし、ドイツ語 können とオランダ語 kunnen の用法を表3のように突き合わせてみると、見えてくることもある。①その一つは Variante 2b の例である。「可能性」には、「選択肢の一つ」という意味があるが、最終的に1つしか選ぶ選択肢がない場合にも、少なくともオランダ語では kunnen でその状況が表現される場合があるということ。②もう一つは Variante 3b の例に見られるように、「ふさわしい行動や服装」など、つまり社会的規範との整合性に関しても、少なくともオランダ語ではしばしば kunnen を使って表現される場合があるということ。そして、③表3には含まなかったが、ドイツ語の例文(7)のように、「許可」の意味で使われているが、語用論レベルでは「指示」と理解できる場合もあるということである。これは、出発点となった例文(1a)と(1b)に関する疑問を解く鍵となる可能性がある。

5. 翻訳コーパスの実例分析

5.1 コーパスについて

出発点となった疑問が、オランダ語からドイツ語への翻訳で目にした訳例だったので、今回もオランダ語の原作と、そのドイツ語翻訳書から、例文を集めた。原作は『ランピエ (Lampje)』(アネット・スハーブ著)⁽¹⁸⁾ というオランダ語の児童文学作品で、会話と語りの両方の部分からなり、1人称から3人称まで、すべての人称主語が使われている。すぐ翌年、ベテラン翻訳家 エーファ・シュヴァイカルトによってドイツ語に翻訳されている。

原作のはじめから164ページまでと、それに相当する翻訳書より、オランダ語かドイツ語のいずれかで kunnen または können が使用されている訳例を集めた。合計239例が集まった。次の表は、簡単な統計である。

ドイツ語オランダ語翻訳例 総数	239組
können を含むドイツ語例文	161文 (67%)
kunnen を含むオランダ語例文	196文 (82%)
kunnen が können で翻訳された例	119組 (50%)

オランダ語の kunnen がドイツ語の können で翻訳された例は約50%であった。思ったより、両者は異なった使い方をされている可能性がある。また、全体として、ドイツ語 können よりもオランダ語 kunnen の使用頻度のほうがやや高い。

5.2 ドイツ語訳に sollen が使われていた例

2組の例が見つかった。オランダ語原文、ドイツ語翻訳の順に並べる。そのあと、本稿執筆者によるおおよその日本語訳を添える。出版されている邦訳書はない。

(8a) 'Ik, eh...' zegt ze. 'Kan ik dan wel zeggen dat ik had geholpen, eh... dat ik schroevendraaiers aangaf en tangen en zo?'⁽¹⁹⁾

(8b) »Ich ... äh ...«, sagt sie. »Soll ich vielleicht auch sagen, dass ich geholfen habe ... dass ich dir Schraubenzieher und Zangen und all so was gereicht habe?«⁽²⁰⁾

「私…」と彼女(=主人公ランピエ⁽²¹⁾)は言う。「それなら私は手伝ったと言ってもいいかしら。ドライバーやペンチとかを手渡したって。」

(9a) 's Ochtends na de afwas geeft Martha haar

een emmer, een borstel en een dweil en wijst waar ze kan beginnen.⁽²²⁾

(9b) Wenn Lämpchen das Frühstücksgeschirr gespült hat, gibt Martha ihr Eimer, Bürste und Lappen und zeigt ihr, wo sie putzen soll.⁽²³⁾

朝食器洗いのあと、マルタは彼女(=ランピエ)にバケツ、ブラシ、そして雑巾を渡し、どこから(掃除を)始めればよいかを指示する。

例文(8)は、主人公ランピエが父に尋ねている場面である。ランピエは灯台守の娘で、父を手伝っていたが、嵐の晩にマッチを切らして明かりを灯せなかったことが原因で船の事故が起こる。まもなくやってくる取調官にするべき説明を父と打ち合わせている場面である。父が満足するたった一つの答えを探しているとすれば、Variante 2b の解釈となるであろうか。ひとえに父の了解を得ようとしているとすれば、Variante 3a という解釈になるであろうか。

例文(9)は、例文(1)と同じ構造を持っている。ランピエは、父が船の事故の責任をとって償っている間、ある海軍司令官の館の管理人マルタのもとで、住み込みで働くことになる。マルタからランピエへの指示の内容が副文で表現され、そのなかでオランダ語は kan、ドイツ語は soll が使われている。モダリティ源はマルタで、仕事の指示をしているので、明らかに「主語外の意志に起因」している。表3では Variante 3a に相当する。しかし、選択の自由はない。その意味では、Variante 2b のオランダ語例文の下に書かれている [moeten] による言い換え表現が、もっとも近いかもしれない。

もう一つ忘れてはいけないことがある。ドイツ語の sollen は、命令文を間接語法で表現するときに使われるという点である。辞書にプロトタイプ用法として載ってはいなかったものの、オランダ語では同じ目的で kunnen を慣例的に使用している可能性がある。注意して観察する必要がある。

5.3 kunnen を使った要求表現

ドイツ語 können やオランダ語 kunnen を使用した2人称に対する疑問文(Kannst du...? / Kun je...?)が、実質的には依頼や要求を表すことはしばしばある。それは、第4節の辞書・文法書から引いた例文でも明らかである。

しかし、今回の翻訳コーパスの中に、kunnen を含

むやや強い要求表現が含まれていて、そのドイツ語訳に können を含まない平叙文が使われていた。2組の例を挙げる。

- (10a) 'Je *kunt* voorlopig wel met mij mee. Tot er een oplossing is.'⁽²⁴⁾
- (10b) »Fürs Erste kommst du zu mir. Bis eine Lösung gefunden ist.«⁽²⁵⁾
「とりあえず私のところに来なさい。解決策が見つかるまではね。」
- (11a) 'Verstoppen en glijpen. Dat *kun* je beter niet doen hier, versta je?'⁽²⁶⁾
- (11b) »Verstecken und rumrutschen. Das lässt du in Zukunft bleiben, verstanden!«⁽²⁷⁾
「隠れたり、あちこち逃げ回ったり。ここでは二度とそんなことをしないでほしいわね、分かった？」

例文(10)は、ランピエの学校の先生(女性)のことばである。オランダ語文を文字通りに訳すと、「とりあえず私と一緒に来ることができる」となるが、そのような穏やかな場面ではない。やってきた取調官に、打ち合わせ通りに話さなかったランピエを、父が殴ってしまう。その結果、ランピエは父のもとを離れなければならない。しかし、行き先がすぐに決まらない。そこで、先生のこのことばとなる。口調も穏やかではない。幼いランピエの首根っこを捕まえて、急いで、しかも強引に家の外に連れ出す場面である。表3では、「主語外の意志をモダリティ源とする許可」を意味する Variante 3a がもっとも近いと思われる。しかし、この場面の場合、選択の余地はない。

ドイツ語訳では、命令文は使われず、普通の平叙文である。文字通り訳せば、「まずは私のところに来る」となる。すでに決まったことのような言い回しである。

例文(11)は、ランピエが働くことになった館に到着した翌朝、マルタに叱られる場面である。ランピエは夜中に聞こえる物音に不安と恐怖を感じてベッドの上に上がれず、ベッドの下で疲れて果てて眠ってしまう。翌朝部屋にやってきたマルタは、ランピエの姿が見えないので驚いて探し回る。荷物は置かれたままである。すると、ベッドの下からランピエが姿を現わす。可能的助動詞の否定文は、0%の可能性ということで、身も蓋もない否定となることがある。ただ、ここでは *beter* (より良い) が含まれているので、今後に向け

たアドバイスと解釈できる。ただ、口調は厳しい。「主語外の意志をモダリティ源とする要求表現」で、「許可」とは言えないので、Variante 3b がもっとも近い解釈であろうか。

ドイツ語訳では、bleibenlassen (やめておく) という、もともと否定を含んだ、人をたしなめるときの典型的な表現があり、普通の平叙文で言い切る形で使われている。命令文ではない。

例文(10)と例文(11)は、強めの要求表現だったが、控えめな要求表現では、ドイツ語・オランダ語双方に可能的助動詞が使われている場合もある。よく似た言い回しで書かれている。

- (12a) 'Die *kun* je misschien straks nog boven brengen. Als je nog eens gaat. Van mij hoeft het niet, hoor.'⁽²⁸⁾
- (12b) »Den *kannst* du hochtragen«, hat Martha gesagt. »Falls du noch mal raufgehen willst. Ich zwinge dich keinesfalls.«⁽²⁹⁾
「それ、できれば上に持っていけるかしら。もしまた行くなら。でもどうしてもってわけじゃないけど。」

原文と訳文のニュアンスがやや異なる⁽³⁰⁾ものの、文構造は似ている。そして、いずれも可能的助動詞を使用した依頼文である。聞き手に断る余地も残している。これはマルタからランピエへのことばである。ランピエが預けられた館の塔の部屋には、モンスターと呼ばれる少年が隠れ住んでいて、マルタは彼の世話をしなければならぬ。しかし、とても鋭い歯と魚の尻尾を持っていて、一度噛みつかれてけがをしたマルタは恐ろしくて近づくことができない。そこで、少年の部屋から一度無傷で戻ってきたランピエに食事を運んでほしいと頼みたいのだが、大人の自分が少女に危険かもしれない仕事を頼むことをためらう気持ちもある。それが、このような控えめなニュアンスの背景にある。

これも、「主語外の意志をモダリティ源とする遠回しな要求表現」と言えるが、断る余地を残しているという点では、表3の Variante 3a に近いであろうか。ただ、語義としては「許可」であっても、発話意図としては控えめな「依頼」と解釈するべきであろう。

5.4 moeten に置き換え可能な kunnen

表3の Variante 2b のオランダ語例文の特徴は、必

然的帰結を表す助動詞 moeten で言い換え可能な点である。ドイツ語の辞書類には、対応する例文が見つからなかった。今回の翻訳コーパスの中に、1文だけ Variante 2b に当てはまるオランダ語文が見つかった。ただし、対応するドイツ語文に können は使われていなかった。

(13a) De mensen liepen rond met doeken voor hun mond, niemand at meer iets en meneer Rozenhout kon zijn voorraden weggoaien.⁽³¹⁾

(13b) Sie hielten sich Tücher vor Nase und Mund und keiner mochte mehr etwas essen, sodass Herrn Rosenholz' Vorräte an Obst und Gemüse verdarben.⁽³²⁾

人々は口を布で塞いでおろおろ走り回った、誰一人何かを食べようとせず、ローゼンハウトさんの店の在庫（の食料）品は捨てざるをえなくなりました。

少しグロテスクな回想シーンである。漁船が大漁で帰港したものの、老漁師が船上で亡くなったために、魚が荷卸しされないうまま腐ってしまい、町中がその臭いでいっぱいになってしまったことを、ランピエが思い出している。最後の「捨てざるをえなくなった」というところに、kunnen の過去形 kon が使われている。「受け入れざるをえない結果」という意味では、表3の Variante 2b のオランダ語例文(2)と同じ使われ方の kunnen である。

ドイツ語の訳文を見てみると、「捨てざるをえなくなった」の部分に、別の動詞 verderben (ダメになる) の過去形が単独で、話法の助動詞なしで使用されている。「捨てる」という動詞とどのような助動詞を結びつけると等価の翻訳になるのか尋ねたいところだが、仕方がない。翻訳者にとっての自然なドイツ語訳は「ダメになってしまった」だったということであろう。

現段階で言えることは、moeten に置き換え可能な kunnen と同じ用法、つまり「受け入れざるをえない結果」という意味の kunnen と同じ用法を、ドイツ語の können は持っていない可能性があるということまでである。断定するには、さらに実例を集めていくしかない。

6. まとめと考察

6.1 können と kunnen の比較のまとめ

辞書・文法書の記述と翻訳コーパスを見比べた結

果、人の意志を反映した用法についてに、次のような傾向を読み取ることができる。

① können も kunnen も「可能性」という意味を共有し、その一部に「許可」も含んでいる。肯定文の場合も疑問文の場合も、何らかの行為を許可された人物には、行動するかしないかを選択する余地が残されている。語用論的には「依頼」として機能することも多い。

②オランダ語 kunnen は、「依頼」よりも強い「命令」「指示」に相当する発話で使用されることがある。今回の翻訳コーパスでは2例見つかった。例文(10)と例文(11)である。ドイツ語訳では können が用いられていない。例数が少ないので確定はできないが、kunnen には、können にはない、人から人への強めの要求を表現することのできる可能性がある。

③ Suematsu (2019) で使用した翻訳コーパスに、人への「要求」を表わす、主に間接話法の副文内にあるオランダ語文の kunnen が、sollen⁽³³⁾ を使ってドイツ語に翻訳されている例を、第2節で取り上げ、表1にも3例挙げた。今回の翻訳コーパスでも、kunnen が sollen によってドイツ語に置き換えられている例が2つあった。例文(8)と例文(9)である。そのうちのひとつ、例文(9)では、表1と同じく副文内で kunnen および sollen が使用されていた。ドイツ語の sollen は、間接話法で命令形を副文内に取り入れるときに使用される助動詞でもある。同語源のオランダ語助動詞 zullen には同じ機能がないので、kunnen が使用されている可能性がある。表1と合わせて4例になるので、「間接話法における要求表現に使用される習慣がある」と言ってもよいかもかもしれない。

④オランダ語 kunnen には、必然を表す moeten と置き換え可能な用法があり、「受け入れざるをえない結果」という意味で使用されている。今のところ、この用法の kunnen が使われたオランダ語文を、ドイツ語 können で訳した文は見つからない。辞書・文法書の範囲でも、ドイツ語の似たような例文は見つからないので、少なくともドイツ語 können の典型例ではないと言える。

6.2 考察

前節のまとめ②と③より、kunnen を用いた文に人の意志が関わるとき、「許可」や「依頼」よりも強い「指示」「命令」などの意志伝達になりうる事が確認できる。「可能性の否定」は、können と kunnen、いずれの助動詞でも強い意味を持つが、肯定文で人から人へと働きかけを行うとき、können よりも kunnen の

ほうがより強い働きかけになることがある。

まとめ④は、本稿のテーマである要求表現からは少し離れる。しかし、ドイツ語では können と müssen が、「可能」と「必然」、弱いモダリティと強いモダリティと対照的に説明されていること⁽³⁴⁾を考えると、まったく無関係と見なすことも難しい。

なぜ「可能性」を表わす kunnen が、「受け入れざるをえない結果」を意味する文で moeten の代わりに使用されるのであろうか。もしかしたら、moeten に義務的なコノテーションがあり、kunnen のほうが素直に「しかたがない」というニュアンスが出せるのであろうか。あるいは、オランダ語の kunnen はドイツ語の sollen に似て、「主語外の意志に起因するモダリティ」の表現としてよく用いられるため、同じ必然性を表わすとしても、主語内の強い意志を表現することもある moeten⁽³⁵⁾よりもふさわしかったのかもしれない。現段階で仮定できるのは、この2点である。

können と kunnen の使われ方の違いの背景については、それぞれの他の話法の助動詞との関係も考慮しなければならない。また、さらに多くの翻訳事例ほか、母語話者の言語使用の実例を集める必要がある。

7. 今後の課題

können と kunnen の辞書・文法書の記述を比較すると、もっとも古く根源的な意味である「主語の持つ能力」という意味は、双方に共通している。しかし、主語外のモダリティ源に由来する諸用法では異なる広がりを見せる。その背景を知るために試みてみたい方法の一つは、メタファーなどを用いて意味が広がるメカニズムを比較することである。

今回の調査では、前節で述べたように、können と kunnen の比較から見えてきたドイツ語とオランダ語の違いが、müssen と moeten を比較したときの結果と、sollen を経由してリンクする点があった。ドイツ語とオランダ語の話法の助動詞の体系を比較するという視点から見ると、今回の調査結果は、小さいパズルの一つはめたにすぎない。しかし、各助動詞のモダリティ源や人の意志との絡みを観察すると、両言語ではダイクシスの中心となる「私」のあり方に差があるという印象が、今回の調査でさらに強くなった。全体像を掴むために、さらに研鑽を続けたい。

この研究は2021年度国立音楽大学個人研究費（特別支給）の助成を受けた。

註

- (1) Biegel (1964: 83) 欧文例文のイタリック体は本稿執筆者による。以下も同じ。
- (2) Biegel (2012: 79)
- (3) ビーヘル (2012: 169) 文中の下線は本稿執筆者による。翻訳者の野坂悦子はオランダ語を中心に、英語、フランス語作品なども日本語に翻訳している。おそらくオランダ語原典から直接翻訳しており、ドイツ語経由での翻訳ではない。なお、和文下線は本稿執筆者による。以下も同じ。
- (4) können と kunnen の時制による語形変化は、第3節の表2を参照されたい。
- (5) これら計3つの翻訳例は、日本語の翻訳例とともに表1にまとめた。
- (6) 末松淑美 (2018: 44) sollen を含む文がオランダ語でどのように翻訳されているかを調査したところ、65例のうち、40例が moeten、15例が zullen、10例がその他の表現に置き換えられていた。その他の10例には、表1に挙げたような要求・依頼を表わす kunnen は含まれていなかった。
- (7) 完了形で、話法の助動詞の過去分詞の代わりに使用される不定詞のこと。
- (8) Duden Band 4 (2016: 570-572)
- (9) Duden Band 10 (2018: 587)
- (10) Algemene Nederlandse Spraakkunst (2021: 18.5.4.4.)
- (11) Van Dale (2015: 2089)
- (12) 例文番号のついていない日本語訳は、本稿執筆者による。例文(3)以降も同じ。
- (13) ANS (2021: 18.5.4.4. iii .a) より引用。オランダ語の mogen は、英語の may、ドイツ語の dürfen に相当する「許可」を意味する話法の助動詞である。否定文では「禁止」の意味になる。
- (14) Duden Band 4 (2016: 572)
- (15) Duden Band 10 (2018: 587)
- (16) Duden Band 4 (2016: 571) Mit Notwendigkeit bzw. Möglichkeit drücken die Modalverben müssen und können unterschiedliche Stärke der Modalität aus. Abgesehen von diesem Bedeutungsunterschied verhalten sie sich weitgehend gleich. (話法の助動詞 müssen と können は、必然性または可能性というモダリティの異なる強さを表現している。しかし、この意味の差をのぞけば、広範囲で同じ振る舞いをする。)
- (17) Duden Band 10 (2018: 587)
- (18) 原作とドイツ語翻訳本の詳細は、本稿末の「例文出典」に記載。前出の『ネジマキ草と銅の城』と同じくオラ

ンダの児童文学賞を受賞した作品である。

- (19) Schaap (2018: 25)
 (20) Schaap (2019: 30)
 (21) 作品タイトル『ランピエ (Lampje)』は主人公の少女のニックネームである。灯台の明かりを守る手伝いをしている。ランプに指小形語尾がついている。日本語にすると「ランプちゃん」であろうか。ドイツ語では Lämpchen と訳されている。
 (22) Schaap (2018: 74)
 (23) Schaap (2019: 88)
 (24) Schaap (2018: 41)
 (25) Schaap (2019: 49)
 (26) Schaap (2018: 69)
 (27) Schaap (2019: 82)
 (28) Schaap (2018: 129)
 (29) Schaap (2019: 155)
 (30) 日本語の訳例は、オランダ語原文に寄せて訳してある。このドイツ語訳をあえて日本語に訳すと、次のようになる：「それを上に持っていけるわよ」とマルタは言った。「もしまた上に行くつもりがあるなら。強制はしないけど。」なんとなく異なるマルタ像が感じられるが、それは解釈の範囲内として先に進む。
 (31) Schaap (2018: 91)
 (32) Schaap (2019: 109)
 (33) 第2節でも述べたが、ドイツ語の sollen は müssen と同じく「必然」を意味し、モダリティ源は主語以外の意志に由来する。要求表現にしばしば使用される。
 (34) Duden Band 4 (2016: 571)
 (35) Suematsu (2019: 55-59) 必然の話法の助動詞であるドイツ語 müssen とオランダ語 moeten の翻訳比較を行ったさい、müssen は主に客観的な必然性を表わすのに対し、moeten はしばしばドイツ語の wollen で訳されるなど主語の強い意志を表現することがある点を指摘した。

参考文献

- Algemene Nederlandse Spraakkunst* (2021), e-ANS(電子版): <https://e-ans.ivdnt.org>
Algemene Nederlandse Spraakkunst (1984), Wolters-Noordhoff Groningen, The Netherlands; Wolters Leuven, Belgium.
 Duden Band 4 (2016), *Die Grammatik*, Dudenverlag, Berlin.
 Duden Band 10 (2018), *Das Bedeutungswörterbuch*, Dudenverlag, Berlin.
 サール、ジョン・R (2006) 『表現と意味』 山田友幸 [訳]、

- 誠信書房。[原題: John R. Searle (1979) *Expression and Meaning: Studies in the Theory of Speech Acts*, Cambridge University Press.]
 末松淑美 (2018) : 「ドイツ語 sollen とオランダ語 zullen に含まれる意志的意味の比較」『国立音楽大学研究紀要第52集』、43-54。
 末松淑美 (2019) : 「ドイツ語 müssen, sollen とオランダ語 moeten における意志的意味の比較」『国立音楽大学研究紀要第53集』、45-56。
 Suematsu, Yoshimi (2019) Notwendigkeit und Volitivität: Ein semantischer Vergleich zwischen dt. müssen und nl. moeten. In: *Neue Beiträge zur Germanistik*, Band 18 / Heft 1, 42-61, indicium.
 末松淑美 (2020) 「Langacker の認知モデルにおける主語および話者の意志」『国立音楽大学研究紀要第54集』、67-77。
 末松淑美 (2022) 「ドイツ語・オランダ語話法助動詞と言語使用の三層モデル」『国立音楽大学研究紀要第56集』、69-80。
 フィルモア、チャールズ・J (2022) 『ダイクシス講義』 澤田淳 [訳]、開拓社。[原題: Charles J. Fillmore, *Lectures on Deixis*. 1997.]
 安原和也 (2017) 『ことばの認知プロセス』三修社。
 和田高明 (2017) 「言語使用の三層モデルと時制・モダリティ・心的態度」『三層モデルでみえてくる言語の機能としくみ』 廣瀬幸生・島田雅晴・和田高明・金谷優・長野明子 (編)、44-68、開拓社。
 Van Dale (2013) *Grammatica Nederlands (NT2)*, Van Dale Uitgevers, Utrecht.
 Van Dale (2015) *Groot woordenboek van de Nederlandse taal*, Van Dale Uitgevers, Utrecht/Antwerpen.
例文出典
 Biegel, Paul (1964) *Het sleutelkruid*, Lemniscaat, Rotterdam, 1964.
 Biegel, Paul (2012) *Eine Geschichte für den König*, Verlag Freies Geistesleben & Urachhaus GmbH, Stuttgart, 2012. Übersetzt von Lotte Schaukal.
 ビーヘル、パウル (2012) 『ネジマキ草と銅の城』野坂悦子訳、福音館。[原題: *Het sleutelkruid*]
 Schaap, Annet (2018) *Lampje*, Em. Querido's Uitgeverij.
 Schaap, Annet (2019) *Emilia und der Junge aus dem Meer*, übersetzt von Eva Schweikart, Thienemann. [原題: *Lampje*]